

# 大阪都心部における水辺居住動向と居住者が捉えた都市河川の役割に関する研究

株式会社 E-DESIGN

三好悠太

大阪府立大学院生命環境科学研究科 加我宏之

大阪府立大学院生命環境科学研究科 下村泰彦

大阪府立大学院生命環境科学研究科 増田 昇

## 1. はじめに

近年、大都市においてバブル経済後の不況の長期化による地価の低落や都心部商業地域での低利用地の出現などを背景に住宅地への用地転換が活発化し、人口の都心回帰現象がみられている。商業・業務機能を中心に整備されてきた大阪都心においても、人口回帰現象はみられるが、居住環境として各種の課題を抱えている。また大阪ではかつて堀川が市中に張り巡らされ、水辺は活況を呈す「水の都」であったが、高度経済成長以降に堀川の多くが埋め立てられ「水の都」としての個性が失われてきた。一方、近年、大阪では、「水都再生」をキーワードに都市再生が進められ、都心部に残る口の字型に流れる都市河川では、水辺を生かした様々な取り組みや空間整備が活発化しつつある。このような状況の中で、都心居住者の生活は都心を流れる河川とより密接に関わり、河川によりもたらされる環境や空間が活用されはじめている。そこで、河川周辺の居住者の行動や意識の実態を把握することにより都市河川の果たしている役割を明確化し、今後の居住環境整備における河川の活用を検討する必要があると考えられる。

大阪の都心居住および都市河川に関する研究では、徳田ら<sup>1)</sup>(2009)は大阪における都心回帰にともなう居住者の属性を明らかにしている。岡ら<sup>2)</sup>(2006)は都心居住者の典型的な居住地域の把握から環境認識や環境評価を通して住環境の捉え方や今後の環境整備の方向性を探っている。阪上ら<sup>3)</sup>(2007)は大阪都心の居住施設である集合住宅の立地動向を明らかにしている。上出ら<sup>4)</sup>(2011)は都心居住者のライフスタイルや屋外行動、行動圏域から居住地としてのあり方を考察している。また花村ら<sup>5)</sup>(2003)は明治期以降の大阪における堀川の変遷を探り、堀川の空間形態や人と水辺との関わり方が時代とともにどのように変容してきたかを明らかにしている。

従って、大阪の都心居住者の実態や都市河川の動向について様々な視点から研究がなされていることが分かる。しかし、近年、大阪の都心部において人口の都心回帰現象が見られる中で、その都心回帰現象がどのような立地に起こっているのか、また、水都といわれる大阪において、都市河川が居住環境上どのような効果を発揮しているのかは明確になっていない。

そこで本研究では、大阪都心部を対象に、近年の人口動態と都市河川との関係性ととも、水辺居住者の都市河川に対する屋外需要を捉えることで、都心回帰現象における

都市河川が発揮している効果や役割を明らかにし、都心生活での屋外需要に対応した沿川空間のあり方を探ることを目的とした。

## 2. 調査及び解析方法

本研究では、大川、堂島川、土佐堀川、東横堀川、道頓堀川が流れる大阪の都心5区である福島区、西区、浪速区、北区、中央区を調査対象地とした。まず、大阪都心5区の人口動態(昭和25年～平成22年：国勢調査)から都心回帰現象を捉えるとともに、5区における平成7年から平成22年の町丁目別人口動態の水際(101地区)と水際以外の町丁目(370地区)での比較を通じて都市河川が都心回帰に及ぼしている影響を探った。次いで、水際町丁目の中から人口増加率の高い町丁目を抽出し、その居住者3,557世帯を対象に2012年10月、11月に郵便留置方式でアンケート調査(有効回答票率400票、11.2%)を実施した。設問内容は被験者の属性および居住理由、屋外需要、都市河川の評価である。解析では各設問を居住年数別にクロス集計し、都市河川の役割とともに水辺の居住者像と沿川での屋外需要を把握した。

## 3. 解析結果及び考察

### 3.1 大阪都心部における水辺居住動向

#### (1) 都心5区の人口動態

図-1は、大阪都心5区における戦後(昭和25年)から

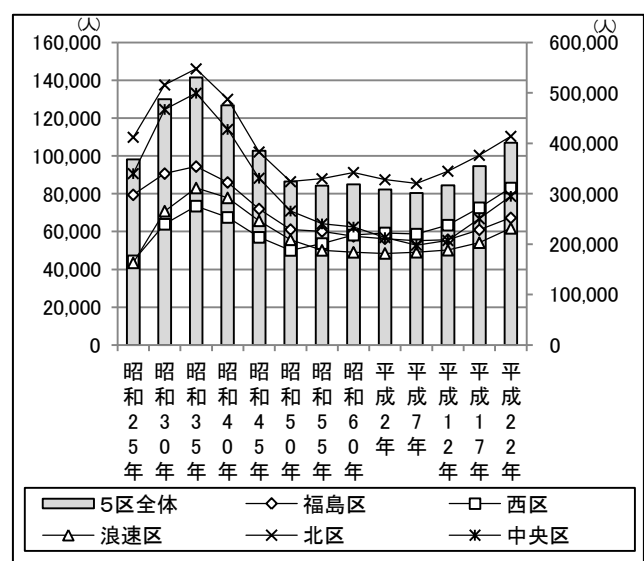


図-1 都心5区の人口動態

現在（平成 22 年）までの人口及び増加率を、国勢調査資料を用いて 5 年毎に集計した結果を示している。大阪都心 5 区全体での人口動態を見ると、大阪都心 5 区全体の昭和 25 年の人口は、368,119 人であり、昭和 35 年にはピークの 530,480 人となり、都心 5 区の人口は増加している。一方、昭和 35 年を境に人口は減少し始め、昭和 55 年からは下げ止まりの傾向を見せている。平成 7 年以降、再び人口は増加し始め、平成 12 年以降、大阪都心 5 区の人口増加は著しく、近年の都心回帰現象は平成 7 年から始まっていることが明らかとなった。

## (2) 都心 5 区における水際町丁目、水際町丁目以外の人口動向

図 - 2 は、大阪都心 5 区における水際町丁目と水際以外の町丁目の平成 7 年から平成 22 年の人口増加率を示している。水際町丁目全体では、人口増加率は平成 12 年で 1.09、平成 17 年で 1.28、平成 22 年で 1.51 となり、水際以外での増加率の平成 12 年の 1.04、平成 17 年の 1.15、平成 22 年の 1.29 に比較し、どの時期も人口増加率が高いことが確認でき、都市河川が存在が都心回帰を助長していることが推定される。

図 - 3 は、大川、堂島川などの 5 河川沿川での水際町丁目の平成 7 年に対する平成 22 年の人口増加率を示している。

各河川全般的にはほぼ同じような傾向を示す中で、特に人口増加率の高い 2.0 以上の地区は、大川沿川では中央部と南側に 2 地区、堂島川沿川では東側と西側に 3 地区、土佐堀川沿川では東側と中央部に 3 地区、東横堀川沿川では全体的に分布している 14 地区、道頓堀川沿川では中央部の 1 地区となっている。なお、以下のアンケート調査はこれらの人口増加率の高い地区で実施したものである。

## 3.2 水辺居住者が捉える都市河川の役割(アンケート調査)

### (1) 回答者の居住年数

図 - 4 は、回答者の居住年数の集計結果を示している。

水辺居住者は、居住歴 10 年以上が約 25%に留まっており、5 年未満が約 4 割、5 年以上 10 年未満が約 3 割と多く、ここ 10 年以内に新たに水辺に移り住んでいることが分かる。

### (2) 居住年数別年齢構成、世帯構成、住前地

図 - 5 は、居住年数別年齢構成と世帯構成、住前地の集計結果を示している。年齢構成は、5 年未満では 40 歳未満が約 5 割と若い世代が多く、30 年以上では 60 歳以上が約 85%を占め、居住年数に対応して年齢構成も高くなる傾向にある。

世帯構成は、5 年未満では一人が約 55%と他と比べ優占しており、新たに水辺に移り住む単身居住者が多いことが分かる。

住前地をみると、大阪市の都心 5 区内の項目が 5 年未満および 5～10 年で約 4 割にとどまり、10～30 年および 30 年以上で 6 割以上と多くなっている。一方、ここ 10 年のうちに移り住んできた居住者は、大阪都心 5 区以外の外部の人が約 6 割と優占している。

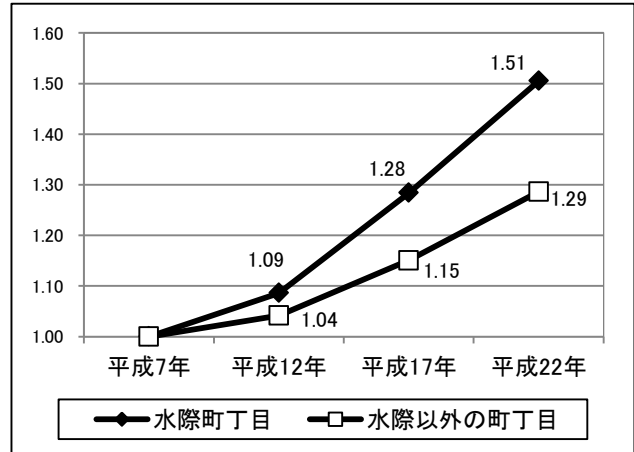


図-2 都心 5 区における水際町丁目、水際町丁目以外の人口動態

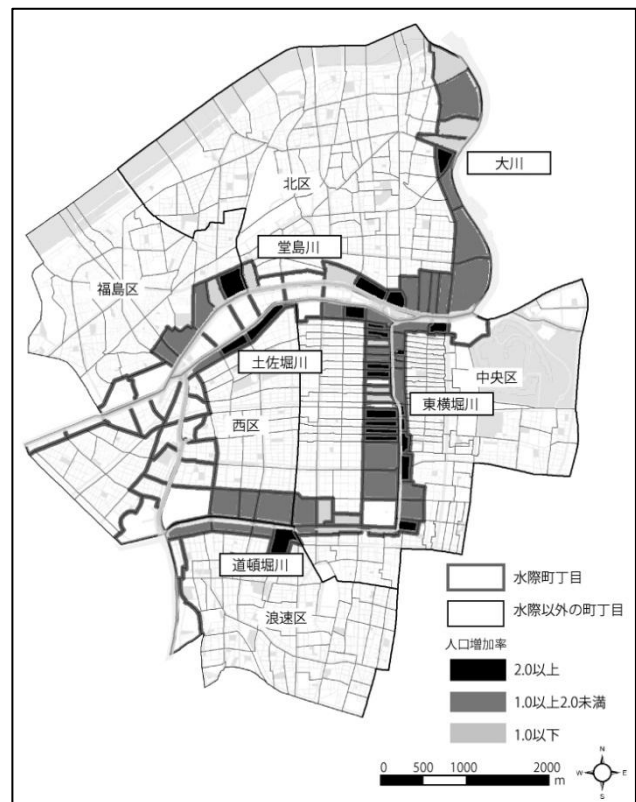


図-3 水際町丁目における人口動態

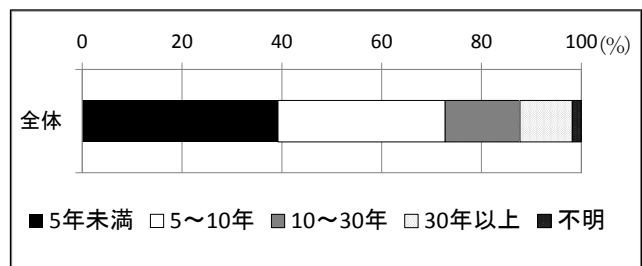


図-4 回答者の居住年数

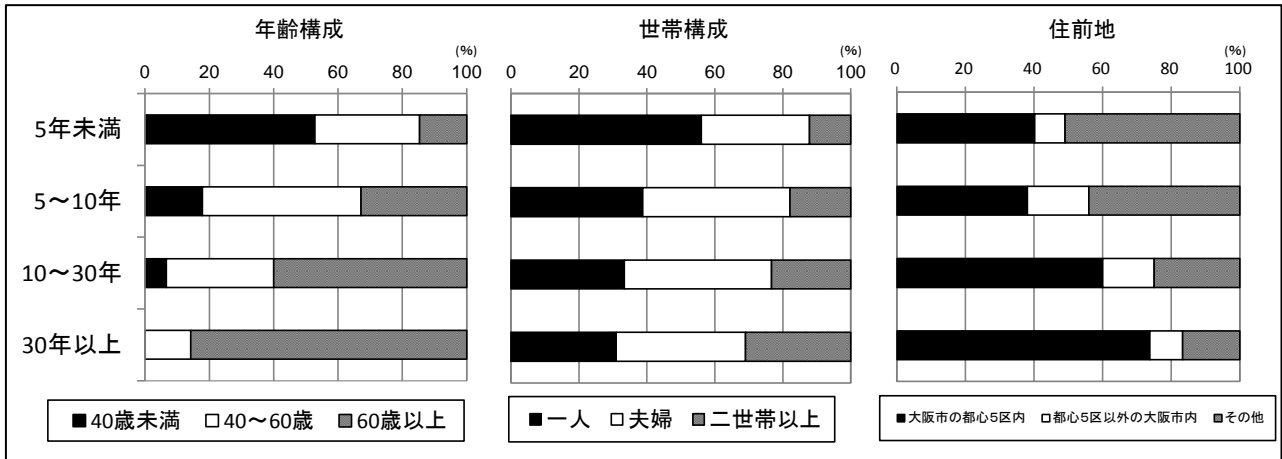


図-5 居住年数別年齢構成、世帯構成、住前地

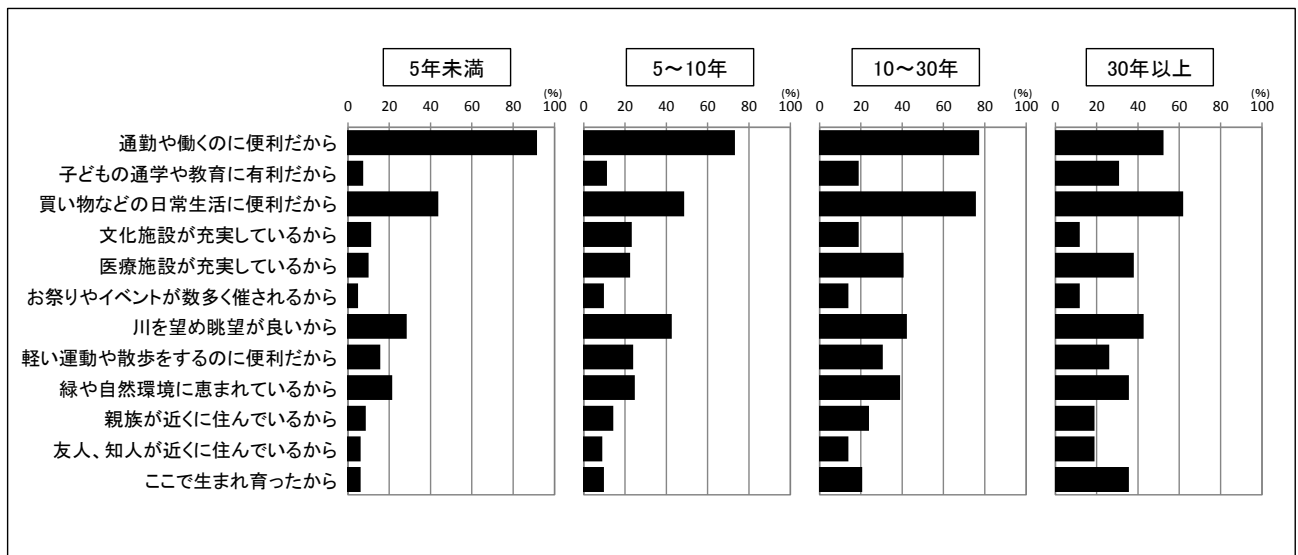


図-6 居住年数別居住理由

(3) 居住年数別居住理由

図-6は、居住年数別居住理由についての集計結果を示している。どの居住年数においても「通勤や働くのに便利だから」、「買い物などの日常生活に便利だから」という利便性が重視されている。加えて「川を望め眺望が良いから」という空間環境面については、居住歴5年未満で約25%とやや少ないものの、5～10年、10～30年、30年以上で約4割と多くなる傾向が認められる。

(4) 屋外需要

図-7は、居住年数別屋外行動内容についての集計結果を示している。どの居住年数においても、屋外行動内容としては「散歩やジョギング」が約8割、「植物や動物などの生き物観察」が4割以上と多く、「休憩や会話、読書」が3割以上と一定の利用がみられた。また、居住歴5年未満や5～10年、10～30年では「サイクリング」、「軽い運動や球技、健康づくり」で3割以上の利用がみられるものの、30年以上ではそれぞれの利用が約2割にとどまり、動的な行

動内容が少ないことが分かる。

(5) 河川の評価

図-8は、居住年数別都市河川の役割に対する評価についての集計結果を示している。全体的に「住み心地は良いと感じる」から「文化活動やイベント活動が多い」といった都市河川の果たす役割に対するプラス面が意識されており、「町の寂しさや空虚さを感じる」から「不法滞在や犯罪不安を感じる」といったマイナス面の中では「洪水や高潮の危険性」を除き意識されていない傾向がある。但し、30年以上では「洪水や高潮の危険性」や「子どもの水難事故の危険性」、「蚊などの害虫被害」を意識していることが認められ、川の持っているマイナス面も意識されていることがわかる。

4. まとめ

以上のことから、都心5区における水際町丁目での人口増加率は都心地区の中でも特に高く、都心回帰における重

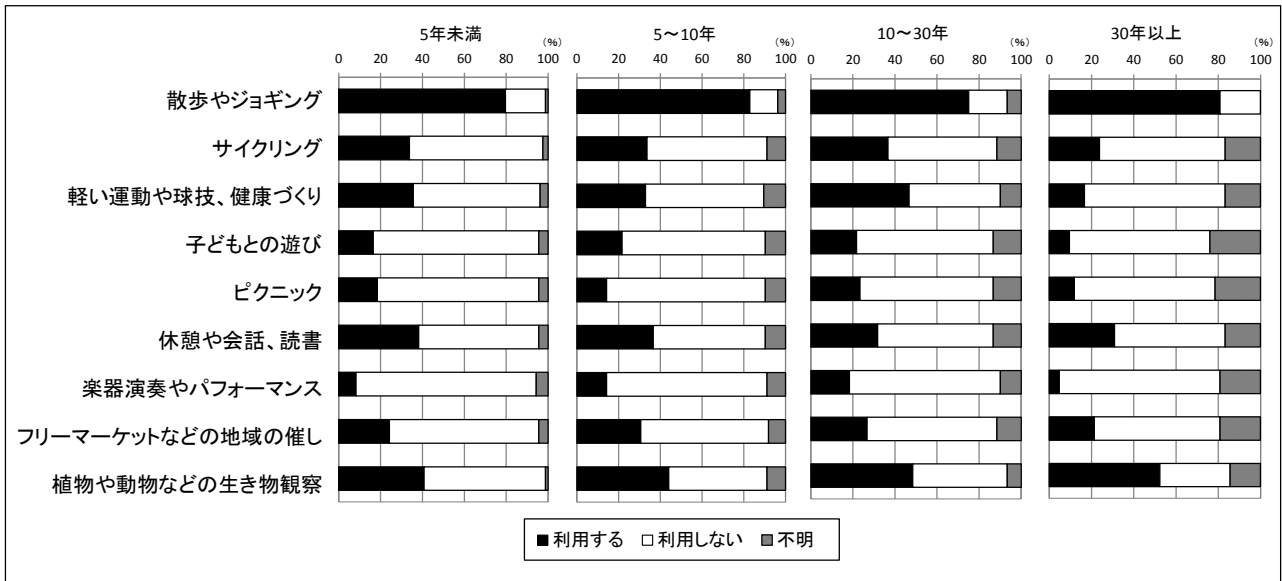


図-7 居住年数別屋外行動内容

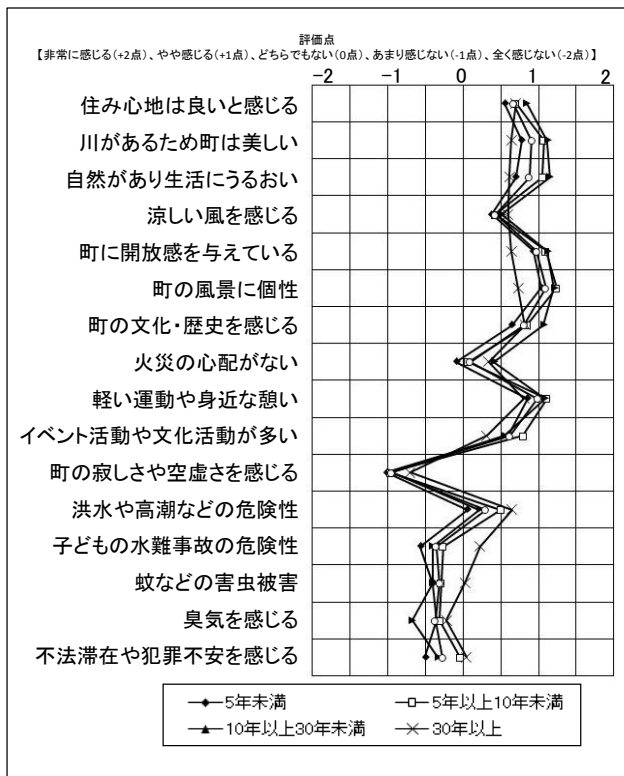


図-8 居住年数別都市河川が果たしている役割に対する評価

要な環境的要因となっていることが推定できた。また、近年、都心の水辺に移り住んだ居住者は20代から40代といった比較的若い世代で、単身や夫婦がほとんどを占め、都心以外からの移り住みも多く、利便性を重視しているものの、川への眺望も考えており、都市河川がまちの快適性の向上や軽い運動、自然を感じることができる場として寄与しているものと考えられる。屋外行動面でも動的なアクティビティから生き物観察や休憩等の静的なアクティビティまで幅広く沿川で行動しており、これらの屋外需要に

対応した空間整備が求められる。また、居住年数が比較的長い居住者は、涼しい風や火災の抑止といった都市河川のメリットを感じながらも危険性についても認識していることも明らかとなった。水辺では多様な世代が居住しており、また多様な利用があることが明らかとなったが、居住空間や賑わいを創出するための沿川といった様々な機能を備える環境へと展開していくためには、空間の整備だけでなく、新旧居住者のつながりや居住者と来訪者とのつながりを考え、沿川空間を介したコミュニティの形成や沿川空間を使いこなすための仕組みづくりを考えていくことが求められる。

引用・参考文献

- 1) 徳田剛・妻木進吾・鯉坂学(2009)：「大阪市における都心回帰-1980年以降の統計データの分析から-」，評論・社会学88同志社大学，pp.1-43
- 2) 岡絵里子・中野弘己・田端修・小浦久子(2006)：「大阪市都心の居住地における居住者の環境認識に関する研究-大阪市都心地域を事例として-」，日本建築学会計画系論文集 第599号，pp.79-85
- 3) 阪上浩基(2007)：「大阪都心商業・業務集積地のマンション立地に伴う景観整備に関する研究」，大阪府立大学修士論文
- 4) 上出竜司(2011)：「都心居住者のライフスタイルと屋外需要から捉えた今後の都心における屋外空間のあり方に関する研究」，大阪府立大学修士論文
- 5) 花村寛寛・加我宏之・下村泰彦・増田昇(2003)：「明治期以降の大阪における堀川の変遷に関する研究」，ランドスケープ研究66(5)，pp.669-674